

S. ブラント Das Narrenschiff(1494)の語法について

～[27] von vnnutzem studierenを手掛かりに～

大 島 浩 英

要 旨

本稿では、初期新高ドイツ語時代の人文主義者 Sebastian Brant の風刺詩集 Das Narrenschiff (1494) の中から、第27章 „von vnnutzem studieren“ を例に、初期新高ドイツ語（上部ドイツ語アレマン方言地域）で書かれたこの詩を中高ドイツ語、新高ドイツ語と比較しながら、個々の語法的特徴について考察を行った。

この時代の書記法には不統一な部分が多いが、摩擦音 h、ch の表記上の揺れ、またこの時代の大きな特徴である必ずしも音声上の根拠をもたない子音の重ね書き、あるいは u/v や、i、j/y といった表記上の交替などが緩やかな規則性をもって使用されている状態がこのテキストにおいて見られた。また音韻面、統語面では、二重母音化、Senkung が起こる以前の状態、gan / gon の並存、中高ドイツ語の人称変化形の名残りなどが見られ、また、文法表示機能に影響する語末音消失（人称、格変化語尾 e の脱落）や、あるいは韻文であることも影響するが不完全な枠構造などもあって副文と主文との区別が不明瞭になるなど、言語的にまだ整備段階にあることが分かる。

キーワード：初期新高ドイツ語、ゼバステイアン・ブラント、阿呆船、ドイツ語学

はじめに

宗教改革目前の1494年、人文主義者 Sebastian Brant によって風刺詩集 Das Narrenschiff (1494) 「阿呆船」が書かれた。その中の第27章 „von vnnutzem studieren“ 「無用の学問のこと」を対象に、初期新高ドイツ語（上部ドイツ語アレマン方言地域）によるこの詩を中高ドイツ語、新高ドイツ語と比較検討し、個々の語法的特徴について考察を行った。

Brant は中世キリスト教的伝統に基礎を置く人文主義者であったと言われ、この詩にもそういった観点からの風刺が加えられているものと思われる。なお、この詩は二行を一組として脚韻で結ぶ形式で書かれているが、以下の和訳では韻律に関係なく、なるべく逐語訳を心掛け、テキストには5行ごとに行数を付した。

使用テキスト

原文：

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Studienausgabe. Hg. von Joachim Knape. Stuttgart 2005. (Reclams Universal-Bibliothek Nr. 18333) S.197 ff.

現代語訳：

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Übtg. von H. A. Junghans. Stuttgart 1964.

Bibliographisch ergänzte Ausgabe 1992. (Universal-Bibliothek Nr. 899) S.101 ff.

略語：Mhd. 中世高地ドイツ語、Frnhd. 初期新高ドイツ語、Nhd. 新高ドイツ語

I

原文

Wer nit die rechte kunst studiert
Der selb jm wol die schellen rürt
Vnd wurt am narren seyl gefürt
正しい学問を学ばない者は
きっと自分で阿呆鈴を打ち鳴らす
そして道化師綱で引き回される

現代語訳

Wer nicht die rechte Kunst studiert,
Derselbe wohl die Schellen rührt
Und wird am Narrenseil geführt.

nit：まずここで否定詞として用いられている nit は現代語の nicht に対応する語であるが、tの前で ch(<h)が消失しており、これは特に westmitteldeutsch、westoberdeutsch で見られた現象である¹⁾。またMhd. では niht と並んで nieht、niet、niut など様々な語形が並存していた。

kunst：普通名詞 kunst の語頭は大文字書きされておらず、このテキストに現れる普通名詞はすべてまだ小文字書きである。大文字書きは元來文の切れ目を示すためのものであったが、文頭や固有名詞の大文字書きが16世紀には普通名詞にも拡がり、その書記法が17世紀頃には定着したと言われる。さて現代語の Kunst は主に「芸術」の意味で使われるが、ここでは「学問(Wissenschaft)」の意味で用いられており、特に中世の大学の教養7科目die [Sieben] Freien Künste²⁾ (リベラルアーツ)を指すものと考えられる。

Der selb：不定関係代名詞 wer を受ける後行詞として用いられており、現代語では指

示代名詞 *der* のみが使われるが、ここでは「同一の」を意味する形容詞 *selb* が添えられている。この場合、現代語では *derselbe* と形容詞の格変化語尾 *e* を添えて一語で表記されるところだが、このテキストではまだ分かち書きされており、2つの語の融合ではなく組み合わせで表現されている。他にもこのテキストでは *das selb*、*do mit*、*dar vmb*、*dar vß*、*zū letst*などにこの現象が見られる。また、*selb* の後の *e* が脱落する Apokope³⁾ (語末音消失) が起こっており格変化表示がなされていない。なお *Der selb* 以下の文は主文であるが、脚韻を合わせるため動詞の *rürt* が文末に置かれている。

jm : この3格は現代語では再帰代名詞 *sich* で表現されると考えられるものだが、この時代ではまだ再帰代名詞は一般化していなかったため、ここでは人称代名詞の3格が用いられたものと思われる。なお現代語訳にはこの3格は挿入されていない。

wol、*rürt* : これらの語は現代語では長音化し、それぞれ *wohl*、*rührt* のように長音を表す *h* を添えて表記されるようになっている。

Vnd : 現代語では *und* となりここでは *u* が *v* で表記されているが、*v* は初期新高ドイツ語期では語頭において母音、子音の双方に用いられる。

wurt : これは現代語の *wird* に相応する受動の助動詞で、3人称単数現在では *mhd. wirt*、*nhd. wird* 共に *i* の母音になるが、このテキストでは *u* に母音が交替している。

narren seyl : ここでも上述のように2つの語の組み合わせが分かち書きされているが、現代語では *Narrenseil* と一語に造語されている。

gefürt : *wol*、*rürt* と同様、*gefürt* も現代語では *geführt* と長音化し、長音を表示する *h* が添えられる。なお、以上の3行は *studiert*、*rürt*、*gefürt* で脚韻を踏んでいる。

II

von vnnutzem studieren

Von unnützem Studieren

無用の学問について

vnnutzem : 語頭の *v* は現代語の *u* に対応するが、語中の *u* はここでは *ü* を表す可能性もある。また別のテキストでは *vnnutze* という、格変化語尾が確定していない表記も見られる⁴⁾。

Der studentten ich ouch nit für

Der Studenten ich auch nicht schone:

Sie hant die kappen vor zū stür

Sie haben die Kappe voraus zum Lohne,

学生たちをも私は容赦しない

彼らはずきんをとりわけ報酬として身につけている

Der studentten : ここでは t の重ね書きが見られる。子音の重ね書きは本来、短母音などの音を表記するためのものであったが、後にはこの場合のように実質的な機能がなく、単なる装飾として重ね書きされることもあった。

ouch : 現代語では auch となるが、Mhd. から Nhd. にかけて起こった舌の位置が下がる Senkung (下げ) の母音変化現象はここにはまだ見られない。

für : 1 人称の変化語尾 e が語末音消失しているが、この語は frnhd. füren: „durchgehen lassen“ 「容赦する、大目に見る」⁵⁾ という意味で用いられ、前述の複数 2 格 der studentten を目的語にとる。これは現代語の führen には認められない意味で、frnhd. に特有のものと思われる。

hant : mhd. han の 3 人称複数現在の形で、現在でも sind などに残っている 3 人称複数現在の語尾 -d がまだ見られる。

vor zū stür : Bobertag はこれに „voraus zur Steuer, zum Eigentum“ という説明を加えており⁶⁾、原文の vor にも „vorab“ 「とりわけ」という注釈が付されている。現代語では単母音化している zu だが、テキスト中の zū ではまだ二重母音 mhd. zuo の影響が見られる。また、stür は現代語の Steuer⁷⁾ に対応するもので、mhd. liute が nhd. Leute へと変化したように、stür から Steuer への二重母音化が起こったものと思われる。また、1 行目と 2 行目は für、stür で脚韻を踏む。

Wann sie alleyn die streiffen an

Und wenn sie die nur streifen an,

Der zippfel mag wol naher gan

Folgt schon der Zipfel hintendran,

それをかぶってみただけで⁸⁾

阿呆ずきんの先端がすぐに続いて現れる

Wann : この場合の wann は時ではなく条件を表す接続詞で現代語の wenn に対応しているが、wann と wenn の意味が区別されるようになるのは nhd. に入ってからと言われる。

alleyn : nur の意味で用いられた alleyn は現代語では allein と表記され、i に替わる y は主に語中と二重母音の一部に用いられた⁹⁾。動詞に関しては、streiffen が音韻の関係で文中に置かれ、wann に導かれる副文内で定形後置は行われていない。

zippfel : ここでは Narrenkappe 「道化帽」の耳のように、zippfel は突き出た先端 (Narrenzipfel) を指していると思われる。

mag : これは現代語の mögen に対応する話法助動詞 mhd. mugen、mügen の 3 人称単数現在形で、ここでは「可能」の意味と考えられる。

naher : 現代語の nachher に相応する副詞で、語中の h が長音記号ではなく Mhd. に見

られるようにまだ ch の音価を担っていることが分かる。

gan : 現代語では gehen となるが、ここではまだ Mhd. の幹母音 a が残っている。またこの行には原文の注釈で „Der Narrenzipfel folgt sogleich“ という説明がなされており、naher gan に folgen を対応させている。

以上の 3 行目と 4 行目は an と gan で脚韻を踏む。

Dann so sie soltten vast studieren 5 Denn wenn sie soltten fest studieren,
So gont sie lieber b^ubelieren So gehn sie lieber bubelieren.

というのは、彼らはしっかりと学問をするべきなのに
好んで悪ふざけに走ってしまう

Dann : ここでは理由を表す接続詞として用いられており現代語では denn で表現されるべきところであるが、この Frnhd. のテキストでは denn が時間的、空間的な順序を表す dann と区別されることなく用いられている。

so : Dann so の so は従属接続詞的に用いられ、während、dagegen といった「対比」、「認容」の意味合いを含んでいる。

soltten : frnhd. sollen (<mhd. soln, suln) の接続法過去で、現代語の sollten と同様に非現実を表現しているものと思われる。また、o の短音を表すために重ねられた現代語の l とは違い、先述の studentten 同様、装飾的に t が重ね書きされている。

vast : この場合の vast は「しっかりと」という意味で現代語の副詞 fest に対応するが、ここではまだ Mhd. の vast が使われている。

gont : 4 行目では幹母音に a をもつ gan が見られたが、ここではこの幹母音が o となって現れており、Frnhd. に gan、gon が並存していたことがこのテキスト中でも分かる。また 2 行目の hant と同様、3 人称複数現在で語尾に t をつける Mhd. の規則がここに残っている。

b^ubelieren : Bube 「少年」から造語されたものと思われるが現代語には存在しない。Grimm では bubelieren の項目でこの箇所を引用し、bubeln と同じ意味として „bubestreiche machen, wie ein knabe aussehen, sich benehmen.“ 「子供っぽいいたずらをする、子供のような振る舞いをする」という説明を加えている。さらに現代語訳では „sich liederlich aufführen“ 「だらしなく（放縦に）振る舞う」や、原文でも „sich übermütig aufführen“ 「大はしゃぎする、悪ふざけする」といった説明が注釈に見られるが、H.-J. Fischer はこれに対してラテン語の „lat. bibere (=trinken)“ 「(酒を) 飲む」との関連を指摘している¹⁰⁾。なお、5 行目、6 行目は studieren、b^ubelieren で脚韻を踏む。

Die jugent acht all kunst gar kleyn	Die Jugend schätzt die Kunst gar klein;
Sie lerent lieber yetz alleyn	Sie lernt jetzt lieber ganz allein,
若者たちはすべての学芸をまったく軽んじて	
彼らが今やひたすら学びたがるのは	

jugent：本来は有声閉鎖音であった Jugend の d が無声音化したため、t という表記を行う Mhd. の表記法がここでは見られる。こういった場合 dt として本来有声音であったことを表示する場合もあった。

acht：ここでは Mhd. ahten とは違って、c を付加して摩擦音を表示している。また、音韻を整えるため 3 人称単数現在の人称変化語尾 et が脱落し、Ekthipsis の現象が見られる。

lerent：これは現代語の lehren 「教える」に対応する語であるが、ここでは逆の「学ぶ」lernen の意味で用いられている。Frnhd. では lernen と lern の区別がまだ曖昧な状態で使用されていたことが分かる。

yetz：前述の alleyn のように、y は語中、二重母音の一部として主に用いられたが、ここでは語頭に使用され j と競合している。mhd. iezuo、frnhd. yetz といった形態から Nhd. では語尾に t が付加された形態へと拡張してゆく。

以上、7 行目、8 行目は kleyn、alleyn の二重母音で脚韻を踏んでいる。

Was vnnütz vnd nit fruchtbar ist	Was unnütz und nicht fruchtbar ist.
Das selb den meystern ouch gebrüst	10 Denn dies den Meistern auch gebrist,
無駄で無益なことばかり	
それと同じことが教師たちにも欠けている	

meystern：ラテン語 magister に由来し、ここでは „Lehrern“ 「教師」の意味の複数 3 格で用いられている。

gebrüst：これは mhd. gebrist (<mhd. gebresten 「欠けている」) に対応するもので、mhd. finf > nhd. fünf、mhd. flistern > nhd. flüstern のように i が ü に変化する円唇化が見られ、これは Frnhd. 時代に上部ドイツ地域を中心に起こったと言われている¹¹⁾。またこの定動詞は脚韻を合わせるため文末に後置され副文の語順になっている。現代語ではこれに対応するものとして nhd. gebrechen (雅語) が考えられる。そして 9 行目、10 行目は ist、gebrüst で脚韻を踏む。

Das sie der rechten kunst nit achten	Daß sie der rechten Kunst nicht achten,
--------------------------------------	---

Vnnütz geschwetz alleyn betrachten

Unnütz Geschwätz allein betrachten:

彼らは正しい学芸を顧みず

無駄話にうつつを抜かしてばかりいる

Das：この das は現代語の dass に対応するが、接続詞の dass に関してこの時代ではまだ指示代名詞や定冠詞の das (<mhd. daz) と形態上の区別は見られない。

rehten：語中の h は摩擦音であるため現在では一般に ch で表記されるが、ここでは mhd. reht のように摩擦音が h だけで表されている。ch の表記は主に語末で用いられるとされるが、これに対して文末の achten 及び 1 行下の betrachten では語中でも用いられており、この点については書記法に揺れが見られる。また、2 格で用いられている rehten の格変化語尾がここでは省略されずに表記されている。

Vnnütz：v が語頭において母音 u として用いられており、また形容詞の格変化語尾が見られない。語中 ü のウムラウト表記については、このテキストでは rürt、gefürt といった表記と、für、stür、gebrüst、vnnütz という両方の表記が用いられ、ここには長母音、短母音による表記上の明確な区別がなされることなく ü と ü が並存している。

またウムラウトに関しては、現代語で Geschwätz と ä で表される音に対して原文では geschwetz と â ではなく Mhd. 以来の e で表記されており、開音、閉音の明確な区別は表記上見られない。なお、11、12行目はそれぞれ achten、betrachten で脚韻を踏む。

III

Ob es well tag syn / oder nacht

Ob es erst Tag war oder Nacht?

Ob hab eyn mensch / eyn esel gmacht

Ob wohl ein Mensch einen Esel gemacht?

まずは昼にならんとするのか夜なのか

人がロバを作ったかどうか

well：「推測」を表す未来の助動詞 mhd. wellen が接続詞 ob の影響により接続法現在で用いられており（直説法現在では wil(e)）、また人称変化語尾 e が語末音消失している。

syn：ここでは語中、二重母音の一部として主に用いられる y が長母音 i に替わって使用されている。またこの語がヴィルゲルの前に置かれることにより助動詞 well とで棒を作っているが、接続詞 ob による副文内の定形後置はなされていない。

hab：この hab(e) も上述の well と同様に、mhd. han が接続詞 ob の影響を受け接続法現在の形で用いられもので、ここでも人称変化語尾 e が脱落している（直説法現在では

hat)。ここではこの完了助動詞と文末の gmacht とで枠構造が作られている。また、文末の gmacht では韻律を整えるため接頭辞 ge- に語中音消失が見られる。さらに枠内の eyn esel では不定冠詞に男性 4 格を表す格変化語尾 -en が欠けている。13、14行目はそれぞれ nacht、 gmacht で脚韻を踏む一方、 ob で同時に頭韻も踏んでいる。

Ob Sortes oder Plato louff	15	Ob Sortes oder Plato gelaufen?
Solch ler ist yetz der schülen kouff /		Die Lehr ist jetzt an den Schulen zu kaufen.
ゾルテスやプラトンは歩いたか		
そんな教育が今では学校の営みだ		

Sortes : Sokrates の省略形で、Junghans の現代語訳の注釈によると、些事にこだわ
る煩瑣哲学としてのスコラ哲学を意識したものと考えられる。

louff : mhd. loufen が、接続詞 ob の影響を受けて接続法現在の形で現れており、f の
重ね書きと人称変化語尾 e の脱落が見られる。現代語の laufen となるような Senkung の
影響はまだ見られない。またこの louff については „(peripatetisch) einhergehe“ 「悠然と
歩く」という説明が原文の注釈でなされている。ギリシャ語の peripatos 「散歩道」に
由来するペリパトス学派（逍遙学派）が散策 peripatein しながら講義を行ったという習
慣があることから、テキストの louff はこの習慣を暗示しているものと思われる¹²⁾。

Solch ler : 指示代名詞 solch では格変化語尾の e が、名詞 ler でも語尾の e が共に語
末音消失している。

der schülen kouff : schülen の表記には mhd. schuol(e) の二重母音の名残がまだ見ら
れるが、この語は複数 2 格で後の kouff (>nhd. Kauf) にかかる。kouff はこの場合、„Treiben,
Geschäft“ など「活動、営み」といった意味で解釈されている。また Bobertag は schülen
という語を特に「大学」の意味で述べられたものとし、さらに Solch ler が指す 13~15
行目の疑問点に対して「ばかげた詭弁学派の教授法である」という解説を加えている¹³⁾。
なお、15、16行目はそれぞれ louff、kouff で脚韻を踏んでいる。

Syndt das nit narren vnd gantz dumb	Sind das nicht Narren und ganz dumm,
Die tag vnd nacht gant do mit vmb	Die Tag und Nacht gehn damit um
それはばか者たちで、まったく愚かなことではあるまいか	
夜も昼もそんなことにかかずらわり	

Syndt : 主語 narren に対応する sin の 3 人称複数現在形の語末 dt は、本来有声閉鎖音
を表す d が語末で無声化したことを表すため d にさらに t を添えて表記されたものと思

われる。しかしこのテキストにおいてこういった表記が表れるのはこの箇所だけで、ここ以外では無声音を表す語尾をもつ mhd. sint が用いられている。

gantz：語尾の tz は主に短母音の後に用いられたが、ここでは子音の後にもこの表記が使用されており、現在では ganz の形で定着している。

dumb：Mhd. には語頭が t に替わって tump、tumb、tum などの語形があるが、u と v に関しては、dumb の語中で u が、そして次行文末の vmb では v が語頭に用いられており、同じ音価ではあるが出現する場所により使い分けがなされている。

Die：これは narren を受ける関係代名詞と考えられ副文章を形成し、tag und nacht をはさんで定動詞 gant と粹を作っている。この動詞 gant は mhd. gan の 3 人称複数現在形で、文末の vmb と組み合わされ、「mit ～とかかわる」という意味を表現しており、これは現代語では umgehen となり分離動詞として機能している。なおこの関係文は、次行の lüt まで続いていると考えられる。17、18行目は dumb と vmb で脚韻を踏む。

Vnd krützigē sich vnd ander lüt		Und kreuzigen sich und andre Leut
Keyn bessere kunst achten sie nüt	20	Und achten beßre Kunst keinen Deut?
そして自らを苦しめ、他人をも困らせる		
彼らはよりよい学芸を尊重しない		

krützigē：mhd. kriuzigen に対応するもので、語中の iu が現代語では eu と二重母音に変化しており Frnhd. では ü で表記されている。この ü は Mhd. の iu と同様に長母音と考えられるが、この後に本来短母音の後に用いられる tz が表記されている。また、krützigē の 4 格目的語 ander lüt の ander には格変化語尾 e が語末音消失している。なお、lüt は mhd. liut に由来し、前述の krützigē 同様、iu → ü への表記上の変化が見て取れ、さらにこれが現代語では二重母音となり Leute に対応する。さて Bobertag のテキストでは19行目の文末に疑問符が付されているが、これは17行目から始まる疑問文の終わりを示しているものであろう。

Keyn bessere kunst：ここでは不定代名詞 keyn の語尾が消失しているが、後続の形容詞 bessere に語尾が残っているため格表示が可能となっている。

nüt：このテキストでは否定詞として常に nit が用いられているが、この箇所でのみ nüt (<mhd. niht, niut) を使うことにより、前行の lüt と脚韻を踏ませることができる。また、この文では keyn と nüt の 2 つの否定詞が用いられているが、これらは二重否定ではなく否定の強調として使用されているものと思われる。

Dar vmb Origenes / von jnn̄

Darum Origenes von ihnen

Spricht / das es sint die fr̄osch gesyn Spricht, daß sie ihm als die Frösche schienen
 それゆえにオリゲネス¹⁴⁾ は彼らについてこう言っている
 曰く、(エジプトを苦しめたのは) 蛙であった

jnn̄ : n の上に置かれた横線はこの場合先行する e の音を表すと思われ、従ってここでは前述の narren を受ける 3 人称複数人称代名詞 sie の 3 格 jnen と考えられる。

es sint : es は次行中 die (do hant) 以下の関係文に対する先行詞として機能しており、強調的意味を表す構文を形成している。また sint は 17 行目の syndt とは違い、無声音を示す t だけが語尾に付されている。

fr̄osch : (<mhd. vrosch) ここでは複数形の語尾 e が語末音消失している。ウムラウト表記については、Brant の „Das Narrenschiff“ 全体で原則的に ä, ö, ü が用いられているが、u ウムラウトに関してのみ ü と ũ の並存が見られる。

gesyn : 現代語では sein の過去分詞として gewesen が用いられるが、Frñhd. 時代のこのテキストでは mhd. sin の過去分詞形 gewesen、gewest、gesin のうち gesin が使われている。21、22 行目は jnn̄、gesyn で脚韻を踏んでいる。

Vnd die hundsmucken die do hant Und als die Hundsmücken, die das Land
 Gedurechtet Egiypten landt / Ägypten plagten, wie bekannt.
 そしてそのときエジプトを苦しめたのはブヨであった

hundsmucken : これはモーゼ出エジプト記 8 章を基にしたものであるという指摘が Junghans の現代語訳の注釈にあり、聖書のこの章ではエジプトを荒らすものとして「蛙」、「ぶよ」、「あぶ」が登場する。原文の注釈には Schnaken、Grimm では hundsfliege という説明があるため、ここでは「蚊」あるいは「あぶ」の意味で用いられているものと思われる。これに対して Bobertag は Kürschner 版テキストの注釈でモーゼ出エジプト記 10 章 6 節を指摘し、Heuschrecke 「いなご」という、別の解釈を行っている。

Gedurechtet : この語は mhd. durchaechten (duraechten) „verfolgen“ の過去分詞と考えられ、Grimm の durchächten の項目には „verfolgen, unterdrücken, quälen“ などの意味が挙げられており、これは ächten 「追放する、非難する」の強調形と考えられる¹⁵⁾。また現代語では、前綴りに含まれる完了の意味との重複を避けるため、durch の前にさらに完了を現す前綴り ge- を付加することはないが、このテキストでは gedurechtet と ge- が付加されており、前綴り ge- の用法に関して現代語とのずれが見て取れる。

landt : ここでも本来の有声音の無声化を表現するため語尾に t が添えられており、これによって 23、24 行目では hant、landt で脚韻を踏んでいる。

IV

Do mit so gat die jugent hyen	25	Damit geht uns die Jugend hin,
So sint wir zú Lyps / Erfordt / Wyen		So sind zu Lips wir, Erfurt und Wien,

そして若者たちは出かけてゆく
 そこで我々は、ライプツィヒ、エアフルト、ウィーン

gat : gan の3人称単数現在形だが、このテキストでは gan と gon のみが現れ、Nhd. に近い e の幹母音をもつ gen は見られない。また、文末の hyen と結びついて現代語の分離動詞 hingehen の意味合いを表現している。

hyen : Frnhd. では二重母音 ye であったものが、mhd. Liecht → nhd. Licht、mhd. gienc → nhd. ging のように Nhd. では単母音の短音 hin へと変化している。

Lyps、Erfordt : それぞれ現代語では Leipzig、Erfurt となり、地名にも変化が見られるが、Erfordt - Erfurt では fordt と furt 「浅瀬」で o、u の母音交替が見られ、これについては Oxford - Frankfurt などにも同様の現象が見られる。

Wyen : Frnhd. の Wyen では二重母音が見られるが、mhd. zuo (>frnhd. zú) → nhd. zu のように二重母音は後に単母音化し、さらに長音化する。このような変化を経た状態が現代語の Wien には残っているものと思われる。なお、25、26行目は hyen、Wyen の二重母音で押韻している。

Zú Heidelberg / Mentz / Basel / gstanden	Zu Heidelberg, Mainz, Basel gestanden
Kumen zú letst doch heym mit schanden	Und kamen zuletzt doch heim mit Schanden.

ハイデルベルク、マインツ、バーセル (の大学) を渡り歩き
 結局恥を持って帰郷する

gstanden : 前述の gedurechtet では、Nhd. で不要な完了表示の前綴り ge- がそのまま残されているが、gstanden では frnhd. stan / sten (ston) の過去分詞 gestanden の e が韻律を合わせるため語中音消失している。また意味的にもこの語は immatrikuliert という大学への入学手続き、滞在といった独特の意味合いで用いられている。完了助動詞としては sint が使われておりこれはドイツ南部地域に見られる特徴であるが、さらに Mhd. の完了態としての意味もここでは作用しているように思われる。

kumen : <mhd. komen は、mhd. wonen → nhd. wohnen のように長音化することなく、Nhd. では kommen となり子音を重ね書きすることで短母音となった。なお、27、28行目は gstanden、schanden で脚韻を踏む。

So ist das gelt geleit wol an

So ist das Geld wohl angelegt:

Studenten kapp will schellen han

Studentenkapp gern Schellen trägt!

そんなことになるために、たぶんお金は使われた

学生ずきんに道化師の鈴がついている

geleit : mhd. legen の過去分詞 geleget の古形 gelegit の g が脱落し、縮約 (Kontraktion) を起こしたもので、Mhd. ではよく見られる現象である。また、この legen は文末の an と組み合わせて「使う」という意味で用いられており、現代語の分離動詞 anlegen 「支出する、出費する」へと語彙化されてゆく。

Studenten, will : 1 行目の Studentten では子音 t が重ね書きされているがこの箇所にはそれは見られず、従ってこの場合の t は前述のように、音声上の根拠が希薄な子音の装飾的重ね書きであると考えられる。これに対して will では、Mhd. wellen の 3 人称単数現在形 wil(e) の i が i の短音表示のため重ね書きされており、現代語表記に近づいていると言える。

最後の 2 行は an、han で脚韻を踏んでおり、そしてこの詩全体の脚韻については an、achten のように鼻音で終わるものが 9 組で最も多く、do、fro など母音で終わるものが 1 組と最も少ない。

おわりに

以上、Sebastian Brant の風刺詩の一つを、韻律の関係を考慮に入れ語法上の観点から調べてみたが、この時代に特徴的な、必ずしも音声上の根拠をもたない装飾的な子音の重ね書きや、u / v、i(j) / y などの現代語とは異なる表記法、また、同じ意味の語でありながら nit / nüt や、gan / gon といった異なる母音の並存、さらには未整備な梓構造形成など、初期新高ドイツ語 (上部ドイツ語地域) の特徴が Brant のこの詩にも見出された。

注 :

- 1) Ebert / Reichmann / Solms / Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993. S. 124.
- 2) 「文法」、「論理」、「修辞」、「算術」、「幾何」、「天文」、「音楽」
- 3) bairisch に始まり、ostfränkisch、schwäbisch、後に hoch-, niederalemannisch、rheinfränkisch、ostmitteledeutsch へ広がった現象。(Penzl, Herbert: Frühneuhochdeutsch. Bern 1984. S. 55.)
- 4) Reichmann, Oskar / Wegera, Klaus-Peter: Frühneuhochdeutsches Lesebuch. Tübingen 1988. S. 92.; Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Manfred Lemmer. 3., erw. Aufl. (Neudrucke deutscher Literaturwerke, N. F., Bd. 5) S. 69.

- 5) Götze, Alfred: Frühneuhochdeutsches Glossar. 7. Aufl. Berlin 1967. S. 92.
- 6) Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Felix Bobertag. Berlin u. Stuttgart 1889. (Deutsche National-Litteratur. hg. von Joseph Kürschner, Bd. 16) S. 75.
- 7) frnhd. steuer: „Geldhilfe“ [金銭的援助]、[Steuer <Stütze: Unterstützung durch Geld und Gut] (Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. 10. Aufl. Tübingen 2002.)
- 8) 原文には streifen an に対して „anziehen“ という注釈が付けられているが、「軽く触れる」という現代語の anstreifen の意味で解釈している日本語訳もある。(尾崎盛景:『阿呆船上』現代思潮社 1968. S. 104.)
- 9) Bobertag, Felix: Kürschner 版。このテキストでは y はすべて i に書き直されている。
- 10) Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Heinz-Joachim Fischer. Wiesbaden 2007. S. 332.
- 11) 工藤康弘・藤代幸一:『初期新高ドイツ語』大学書林 1992. S. 43.
- 12) 『スーパー・ニッポニカ2003』(DVD-ROM版) 小学館 2003. 「アリストテレス学派」の項 (加藤信朗)
- 13) Bobertag, Felix: a.a.O., S. 76.
- 14) 古代キリスト教の代表的神学者、哲学者。アレクサンドリア生まれ。
- 15) Bobertag (Kürschner 版) では durchechtet: „verdorben, verwüstet“ 「荒廃した」という注釈が付けられている。
- 16) 挫折した学生たちは自分たちの教養に基づいて、しばしば印刷職人や校正係になった。(Junghans による現代語訳、„Druckerei“ の注)
- 17) 工藤康弘・藤代幸一: a.a.O., S. 44.

上記以外の参考文献:

- Baufeld, Christa: Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1996.
- Gärtner, Kurt / Steinhoff, Hans-Hugo: Minimalgrammatik zur Arbeit mit mittelhochdeutschen Texten. 2. Aufl. Göppingen 1977.
- Grimm, J. /Grimm, W. : Deutsches Wörterbuch. 33Bde. Leipzig 1854 – 1971. (dtv 5945)
- Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 38. Aufl. Stuttgart 1992.
- 伊東泰治他:『中高ドイツ語小辞典』同学社 1991.
- 古賀允洋:『中高ドイツ語』大学書林 1982.
- 相良守峯:『ドイツ語学概論』博友社 1965.